

イネ苗タチガレ病 (*F. solani* SNYDER et HANSEN) に関する研究(第 1 報)

奈須田和彦*・石本 昭司**・坪田 昭雄***

(*福井県立農事試験場・**大野農業改良普及所・***木田農業協同組合)

近年水稻育苗の変遷につれて、保温折衷苗代や畑苗代において *Fusarium* 属による立枯病の発生が目立つて来ている。本菌は信大松尾卓見教授によつて *F. solani* と同定された (form は未同定・私信)。菌の発育適温は 25~30°C, 発病適温は 25~35°C と思われる。発病適温の前処理温度として 5~10°C に10日間おくと発病が多くなつた。1日おきに変温してもあまり発病は多くならなかつた。土壤水分 (最大容水量に対する) は低い程 (30~50%) 菌の進展よく気中菌糸はやや逆の関係で

あつた。播種前の土壤消毒剤としては Zentmyer 法および圃場試験の結果ソイルシン乳剤, シミルトン乳剤, チンサイド乳剤の各 500倍, 1000倍が良かったが, チンサイド乳剤は葉害がみられた。粉剤としては AFB, AFB₂ の 6kg/10a がよかつた。畑苗代での発病後の病勢進展阻止には錠剤ルベロン 5 T/10l, ソイルシン乳剤, シミルトン乳剤1000倍が有効であつた。種子消毒の場合ソイルシン乳剤は Hgとして10~50p. p. m. で発芽傷害が顕著であつた。また水による流亡が大きかつた。

早植栽培と稲の病害との関係

中 里 清

(農林省北陸農業試験場)

早植栽培を行つた稲には病害発生の様相にどのような変化があるものかを昨年に引続いて試験した。本年は播種期並びに移植期を変えたもの, 播種期を一定にして移植期を変えたもの, 播種期を変えて移植期を一定にしたものについて各種病害の調査を行つた。その結果を総括すると表のとおりである。一般に早植又は早播によつて多く発生する傾向があると思われるものに頸イモチ, 節イモチ, モンガレ, 小粒キンカク, ゴマハガレ, イナコウジ病等があり, 少くなるものに葉イモチが上げられるようである。この成績は昨年の成績と必ずしも一致していないが, その年の環境その他の条件によつて多少の違いもある様に思われる。

移植期及び播種期の早晚と病害発生の程度

	播種期並びに移植期(昭34)			播種期並びに移植期			播種期			移植期		
	早	中	晩	早	中	晩	早	中	晩	早	中	晩
葉イモチ	少	中	少	少	中	多	少	中	多	少	中	多
頸イモチ	少	多	中	多	中	少	多	中	少	多	=	=
節イモチ	多	中	少	多	中	少	多	中	少	=	少	=
モンガレ病	多	中	少	多	中	少	=	=	=	多	=	=
アミハン病	少	中	多	多	中	少	多	中	少	少	中	多
小粒キンカク病	多	中	少	多	中	少	多	中	少	=	多	=
イナコウジ病	多	中	少	中	多	少	中	多	少	中	多	少
ゴマハガレ病	—	—	—	多	中	少	多	中	少	多	中	少

イネシラハガレ病菌ファージ OP₂ の特性について (2)

吉 村 彰 治・吉 野 嶺 一

(農林省北陸農業試験場)

イネシラハガレ病菌ファージ OP₂ の生物学的並びに理化学的性質の若干については既報したが, *Xanthomonas oryzae* 以外の他の *Xanthomonas* 属菌及びその他 2・3 の細菌との親和関係については未検討であつたので, 1960年農技研向研究室より分譲をうけた *X. campestris*, *X. citri*, *X. puruni*, *X. cucurbitae* 及び

X. phaseoli 2 菌株と著者が大豆より分離した *X. phaseoli* var. *sojense* 3 菌株及び稲並びにエノコログサより分離した黄色細菌各 2 菌株を供試し, これらの細菌に対する OP₂ の寄生性について 溶菌反応により実験した結果, いずれの細菌に対しても OP₂ は寄生性を有しないことが判明した。